

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

本研究所には幸島野外観察施設があり、草分け時代からすれば、すでにほぼ30年の研究史を有し、完備した個体追跡資料を抛り所に、多彩な研究がつづけられてきた。その学問的寄与は甚大であり、今後さらに発展が期待される。しかし一方ニホンザル本来の生息条件からすれば、孤立した1群が、約30ヘクタールに生息するという箱庭のサンプルであることは否めない。多くの群れが連続分布し、群間関係をふくむ多様な生活が営まれるところこそ、ニホンザルが進化をつづけ、適応している舞台である。

幸島以外でも、高崎山・嵐山はじめ多くの野猿公苑、また餌づけされない純野生群についても観察等が行われ、相補って研究を進展させてきた。しかし野猿公苑は、一部を除いて研究者の管理外にあり、餌づけという条件以外にも、無数の限界があった。一方純野生群は、近年の森林開発と、それに関連ある害獣化のもとに、年間捕殺数2,000頭という数字が示すように、まことに不安定な状況におかれ、計画的研究が保証されない。

かかる状況下に、典型的なニホンザル生息地を、その生息環境とともに確保し、理想的な半永久的研究を可能にすべきだという、切実な願望がおり、この研究林構想が打ち出された。

対象にしたのは、管理が国の責任で行われている国有林とし、ニホンザル分布の北限である下北、南限である屋久島、そして中核部としての中部、これには多雪の真日本型を代表する上信越、寡雪の表日本型を代表する木曾を選び、計4ヶ地点がとりあげられた。それとともに各地点での準備的研究も開始されたが、昭和48年度に下北に特別事業費予算がつき、53年度に上信越がというように、その実現は遅々たるはこびとなっている。しかし4研究林の実現は、ニホンザル野外研究を確実にする必須条件と考えており、将来幸島野外観察施設を発展解消し、5ヶ所から成るニホンザル野外研究施設を設けることは、本研究所の重大な任務であり、将来の野外研究の主軸を形成することであると、決意ならびに抱負を抱いている。

1. 下北研究林

下北半島には、4群から成る南部の個体群と、3群から成る北部の個体群があり、これら両地区のサルの群れ、個体数、各群の遊動が明白になったのは、主として研究林予算によっており、足沢貞成・東滋を核とする継続的な遊動追跡の結果である。

この極限地のニホンザルは、とくに条件のきびしい冬季において、ブナ・ヒバ混合林のみを利用し、海拔400m以上のブナ純林はまれに通過するだけ、また天然2次林(落葉広葉樹)や人工林(スギ)も生息に役立たない。この生態的特性にもとづき、国有林施業がサルの存続を可能とする形で行われるよう、森林生態学者の参加をえて、営林局との間で検討が行われている。

北部つまり研究林内での生息密度は、平方キロあたり1.2~1.3頭の間で非常に薄く、群れの遊動域は20平方キロに達する。この極限状況での人口動態が過去に加えて今後もトレースされるが、頻発する分群行動の実態、サルによる環境評価、その他多くの当面の問題が解かれつつある。

2. 上信越研究林

下部で2メートル、上部で6メートルの積雪を記録する典型的豪雪地で、ブナ帯を中心に、原始植生のよく残る魚野川流域、伐木がほぼ終り、川沿い植生だけが保護された雑魚川流域、もと新炭林で2次林が発達してきつつある横湯川流域の3相が含まれ、比較が可能である。餌づけ群を含む横湯川流域での研究史はすでに長く、他の地域についても予察がくりかえされてきた。研究費による基地建設は、これまで困難であった魚野川・雑魚川方面での研究に狙いをつけて行われている。臨床、生理、形態、生態、社会の5分野からの、適応問題の総合調査は、横湯川の諸群についてこれまでに3回(第3回が54年2月)行われたが、基地ができるので、純野生群についても行われることになる。この他に植物環境、とくに森林及びサルの食物の生産量測定を54年次から開始し、長期継続することになる。観察を主とする生態・社会的資料と、以上の方法による資料とを総合し、上述の3相をも考慮しつつ、この地区でのサルの生物的適応の究明が、当面の目標となっている。

3. 木曾研究林(候補地)

ニホンザルの最大高度記録2,600mを有する中央アルプスの西斜面で、上松町と大桑村にわたる

研究林予定地内だけで5群, さらに隣接区への連続した分布が確認されている。表日本型自然の代表で, 高度適応にも興味があるが, 研究所から2時間以内で到達でき, すでに学生実習にも利用されている。これまで10次延31人による予備調査が行われており, 同日に3群を観察するなど, 遭遇率が高く観察が容易なことも注目される。1,900ヘクタール中98%が保安林で無施業区, 林相は原始林に近い。個体識別も間近に行われるであろうし, 予算がつきしだい, 急速な研究の進展が期待できる。

4. 屋久島研究林 (候補地)

唯一の亜種であるヤクニホンザルが, さいきんまで島一円に濃密分布していたが, そのおもかけは島の西北に残るのみ。辛うじて保存されることになった約1,300ヘクタールの候補地には, 今では稀少価値となった照葉樹林の代表的植生が見られ, 9群以上が生息する。昭和48年以後調査が行われているが, とくに50年以降けいぞく観察が行われ, 餌づけされないニホンザルとしては, これまででもっとも精度の高い研究となってきた。個体識別もかなり進んでいる。この貴重な研究地を確保し, 安定した長期研究をつづけるため, 研究林としての体制整備が不可欠と考えられる。

(川村俊蔵)

大学院学生

昭和58年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類分科の学生, 指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
渡辺邦夫	D3	川村 俊蔵	メンタウエイに生息する霊長類に関する比較社会学的研究
菅原和孝	D3	河合 雅雄	ヒヒ類の種間関係についての社会学的研究
雲石邦義	D3	川村 俊蔵	霊長類の生態学的研究
松村道一	D3	久保田 競	霊長類の随意運動の制御におけるシナプス機構の解析

B.S. グレワル	D3	河合 雅雄	ニホンザルにおける活動様式と行動の社会生態学
J. ブルトン	D3	川村 俊蔵	湯河原におけるニホンザルの社会行動および社会構造の分析
十川和博	D3	高橋 健治	霊長類の組織タンパク質の分解機作の研究
浜田生馬	D3	久保田 競	皮質運動ニューロンの準備的活動の研究
丸橋珠樹	D2	河合 雅雄	ヤクザルの社会生態学的研究
森山昭彦	D2	高橋 健治	霊長類のタンパク分解酵素の性状の研究
伊藤真一	D1	久保田 競	注意発現の神経機構の研究
川本 芳	D1	野澤 謙	遺伝的変異よりみた霊長類の系統に関する研究
小島哲也	D1	室伏 靖子	ニホンザルの個体認知行動の実験的分析
松本 真	D1	江原 昭善	霊長類の顎・顔面頭蓋の形態学的研究
川合恭子	M2	近藤 四郎	霊長類足骨に関する形態学的研究
船橋新太郎	M2	久保田 競	スキルネスの神経機構の研究
藤田和生	M2	室伏 靖子	ニホンザルの概念学習に関する実験的研究
今井一郎	M1	田中 二郎	沖縄県西表島における狩猟, 漁撈, 採集
浜田 穰	M1	近藤 四郎	ニホンザルおよびその他のマカクの形態形成
星野次郎	M1	河合 雅雄	ニホンザルの群におけるオトナオスの役割